

18 世紀後半における J. S. バッハの四声コラール受容

松原薫（東京大学）

本発表ではヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）の《四声コラール曲集》（BWV253-438）の出版背景を考察することによって、18 世紀後半におけるバッハ受容の様相を明らかにすることを試みる。

《四声コラール曲集》はバッハの死後、息子 C. P. E. バッハ、弟子キルンベルガーの尽力によってブライトコプフ社から出版された（1784-87）。曲集に収められたコラールは既存の受難曲、カンタータといった楽曲から抜粋されたものが主である。特筆すべきは本来教会音楽の一部として歌詞を持っていた声楽曲としてのコラールが、出版に際して歌詞のない純粋な器楽曲へと形を変えたことである。バッハが作曲技法の教授に四声コラールを用いていたこと、四声コラールを収集した筆写譜が弟子の手によって残されていることなどから、《四声コラール曲集》は作曲技法の模範として出版されたという見解が一般的である。本発表では以下の点に着目して議論を行うことにより、先行研究においてはまだ輪郭が描かれているにすぎない《四声コラール曲集》出版について立体的な像を浮かび上がらせることを目指す。

18 世紀後半に出版された《四声コラール曲集》にはブライトコプフ版のほかにも、途中で出版中止となった未完のビルンシュティール版（1765, 69）があった。まず二つの出版譜の序文、出版に際して交換された書簡を検討し、《四声コラール曲集》が作曲技法の学習者や愛好家を対象としており、将来のために継承されるべき音楽の遺産と目されていたことを明らかにする。次にブライトコプフ版の出版に最も熱心に関わったキルンベルガーの音楽理論書『純正作曲の技法』（1776）を参照する。彼は著書の中でバッハの四声コラールに触れ、そこに教会旋法的な性質を見いだしている。そしてバッハの旋法的なコラール編曲は 18 世紀後半当時に主流であった調性的な和声付けと比較して非常に優れており、コラール編曲の模範であると述べる。ただし教会旋法と調性をめぐる 1720 年代の論争においてすでに教会旋法よりも調性の使用の方が多くの音楽家によって支持されていたことを踏まえるならば、キルンベルガーが旋法的な性質を重視する態度はかなり復古的と言える。

以上の考察から《四声コラール曲集》は、作曲技法の模範という実践的側面だけではなく、18 世紀後半にすでに失われてしまっていた旋法的な和声付けといった性質を残していると考えられたがゆえに、貴重な音楽遺産として出版が急がれたのだと推察することができる。さらに同時代の作品というよりむしろ巨匠の遺産としてバッハの作品を捉えるという動向がいかなる見地から生じ展開したものであったのか、というバッハ受容の新たな問題の地平を切り拓くことになると考えている。